

タイトル	ウィーンの墓の物語 - 都市と墓地の文化史 -
著者	北原, 寛子; KITAHARA, Hiroko
引用	北海学園大学学園論集(194): 91-114
発行日	2024-07-25

ウィーンの墓の物語

—— 都市と墓地の文化史 ——¹

北 原 寛 子

わたしはこの世から消え去った、
これまではこの世で長い時間を無駄に過ごしたのだけれど。
あの人はもう長いことわたしのことを耳にしていない、
彼女はきっとわたしが死んでしまったと思っているだろう。

わたしには何もこだわることはない、
あの人が私を死んだと思うかどうかなど。
わたしはそれにまったく反論することもできない、
なぜならわたしは本当にこの世から姿を消したのだから。

わたしはこの世の雑踏からは消えてしまった、
そして静かなところで休んでいる。
わたしは1人きりで生きている、わたしの空の中に、
わたしの愛の中に、わたしの歌の中に。

これはグスタフ・マーラーによる歌曲集「リュッケルトの詩による歌曲集」全5曲の第4曲目「わたしはこの世から姿を消し」の歌詞である²。語り手は自分がこの世から去ったことを認めている。しかし現世の喧騒から姿を消しただけであって、静謐が支配するどこかにひっそりと存在

¹ 本稿は2023年4月1日-2024年3月31日に実施されたオーストリア・ウィーンにおける在外研修の成果の一部である。文学・文化研究の「副産物」として位置づけられるとともに、2024年11月2日に予定している英語以外の外国語小委員会主催市民公開講座「世界の言語と文化のモザイクを眺める」第3回での報告準備を兼ねている。

² Vgl. Friedrich Rückert: Ein Ausschnitt aus dem „Liebesfrühling (1821)“. In: ders: Gedichte. Hrsg. von Walter Schmitz, Stuttgart; Reclam, 2005, S. 117. マーラーの歌曲で第三連の歌詞「この世の雑踏」Weltgetümmelは、リュッケルトの原詩では同じ意味だが Weltgewimmel という語が用いられている。また「わたしは1人きりで生きている」はオリジナルでは「わたしはわたしの中に生きている」となっており、作曲に際し若干変更が加えられているのがわかる。



グリンツィング墓地のマーラーの墓



グリンツィング墓地から市内中心部の眺め

して、語り手の思いややさしさに、語り手が遺した歌のなかで触れ合うことができると伝えている。死後にあつてなお魂が生き続けこの世をそっと見守っているかのような温かさが喚起される。マーラーの音楽は、強まったり弱まったりしながら吹く風にたなびかせるようにやさしくリュッケルトの紡ぎ出したことばに寄り添っている。そよ風が彼岸の語り手から発せられる声であるかのように旋律が流れ、ふと気がついた時にはその声もう聞こえなくなってしまうかのような、儚さと切なさが溢れた曲調である。この歌を作曲した偉大な音楽家グスタフ・マーラーは50歳の時にこの世からは姿を消したが、ウィーン市19区にあるグリーンツィング墓地に1911年以来眠っている。19区はウィーン市の北部に位置し、北に向かうにつれて高くなる山に囲まれている。一定の高さにそろえられた建物がひしめいているウィーン中心部とは対照的に、19区まで来ると個人の家も立派な邸宅風でゆとりをもって建てられており、それを取り巻くならかな丘陵にはワイン用のぶどう畑が広がり自然も豊かである³。グリーンツィング墓地に立つと、重なる数々の墓石の向こうにウィーン中心部の背の高い建物群のシルエットがうっすらと見える。マーラーの墓の前からドナウ川とウィーンを見下ろす時、街を包む広い空のなかに大作曲家が作品に託して遺した思いが雲の彼方からかすかに響いてくるような錯覚にとらわれる。いつも無駄なこととは思いつつも、偉大な作曲家その人に捧げられた墓石の傍に、この曲が表現する現世と来世が繋がる奇跡の門がひょっとしたら開くのかかもしれないという得体の知れない期待を抱いてしまう。彼の墓はちょうどどっしりとした扉を思わせる直線的でシンプルな形をしている。マーラーは自らの墓石に、名前以外に何も刻む必要はないとの考えだったそうである。マーラーを慕う人にとっては名前だけで十分なはずで、この墓をみてピンとこない人が訪ねてくる必要はないからだという⁴。

マーラーが亡くなったのと同じ1911年に、ホーフマンスタールの戯曲『イエーダーマン』*Jedermann*が初演されている。この作品は、15世紀にイギリスで上演されて以来各地でいろいろな版が作られていた『エヴリマン』*Everyman*の翻案である。英語の*Everyman*と同様にドイツ語の*Jedermann*には「人はみな」「誰でも」の意味も含まれている。主人公のイエーダーマン氏（＝「誰でもさん」）は裕福で健康な40歳の男性である。貧乏で困窮している隣人には冷淡に対応するが、飲み食いの奢侈は好むなどして日々の暮らしを謳歌していた。それを天上から見ていてた神は「死」に今日中にイエーダーマン氏を巡礼の旅に、つまり死出の国へと出立させるように命じる。イエーダーマンは、彼の母の悪い予感に構うこともなくのんきに仲間たちと飲み食いしているが、そこに突然「死」が現れ彼を黄泉の国へ連れ去ろうとする。イエーダーマン氏は猶

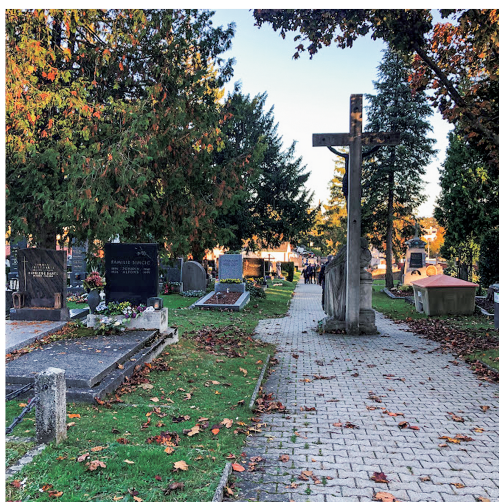
³ マーラーの眠るグリーンツィング墓地から西に向かって目と鼻の先にハイリゲンシュタットと呼ばれる地区がある。ここはベートーヴェンがしばしば滞在し、有名な遺書を残したことでも知られている。さらに交響曲第六番「田園」の舞台となった地である。これだけでも十分に有名作曲家ゆかりの地があることに驚嘆できるが、ウィーンは街のあちこちにそうした有名なスポットがあふれており、世界文化を牽引した時代が長くあったという事実を改めて思い知らされる。

⁴ 村井翔『作曲家 人と作品 マーラー』音楽之友社、2004年、167頁参照。

予を乞い、1時間のみ許される。一緒にいた仲間たちに助けを求めるが、彼らは去ってしまう。同様に親戚も離れていってしまう。召使たちは逃げ出し、財産も何の役にも立たない。絶望する彼に弱々しいながらも声をかけてきたのは「成したこと(業績)」Werkであった。彼女には姉妹の「信仰」Glaubeがいるが、「信仰」はこれまでイエーダーマン氏に邪険にされたといって怒っている。しかし彼女はイエーダーマン氏の改心を受け入れる。イエーダーマン氏が「成したこと」に寄り添われて審判の場に出ると、「信仰」も力添えをして悪魔を追い払ってくれたので、彼は天国に迎え入れられた。人間は死に際して、親戚も知人も財産も役に立てられないが、ただみずからの成したことと信仰だけは死後も保ち続けることができるという教訓を含んでいる。

マーラーの墓の潔い姿を見ていると、ホーフマンスタールが『イエーダーマン』に込めたメッセージがまざまざと思い起こされる。わたしたちは彼の「成したこと」を愛し、その「成したこと」に慰めをもとめつつ彼の墓まで導かれるからである。リヒャルト・シュトラウスの名作オペラ『ばらの騎士』や『影のない女』などに脚本家として携わったことでも知られるフーゴー・フォン・ホーフマンスタールであるが、彼もウィーンで永遠の眠りにつく芸術家の1人である。彼の墓があるのは、マーラーの墓があるウィーン市北部とは反対、南西の端に位置するカルクスブルク墓地である。とてもこじんまりとした墓地で、ホーフマンスタールの墓は入り口からまっすぐ伸びる道を進んだ突き当りに位置し、横に大きく、墓地の周りを囲む後ろの煉瓦の壁と一体化しているかのようである。文字が墓石の大きさにたいして小さくて書体も繊細なので、白地に赤文字が記された大きな墓だというのに、圧迫感よりも周囲と溶け込んだ調和を感じさせる。親族と一緒に眠っており、詩人本人以外にも複数の名前が刻まれている。ホーフマンスタールの墓を訪ねたのは、2023年11月1日の午後だった。11月1日はカトリック教会では万聖節とされ、すべての聖人にささげられた大切な日である。オーストリアでは国が定める祝日にもなっており、天国にいる人々を改めて偲ぶ重要な契機となっている。多くの市民が墓参しており、この日の墓地はどこにもぎやかだった。15時過ぎにカルクスブルク墓地にたどり着くと、服装からそれとわかる教会関係者たちと信者たちがちょうど死者たちのために祈祷している最中だった。まずは墓地の中心に建てられた大きな十字架のところでしばらく祈りを唱えていた。その後鎖でぶら下げた香炉を振りかざす聖職者を先頭に、全員が列をなして墓地の通路をゆっくりと歩き、みんなで魂の平安を願う祈祷を続けていた。カトリックの墓参には花輪やろうそくが用いられるが、お線香がないと思っていた。しかしこの墓地での祈りの儀式で、教会での礼拝時と同様に香を炉に入れてふわりと振っている様子を見て、使い方は違えど、香りを死者にささげる習慣はキリスト教圏にもあることを見て取った。洋の東西を問わず共通する習慣をみつけられたときには不思議と心安らぐものである。その日のウィーンは素晴らしい晴天に恵まれ11月にしては暖かく気持ちの良い天候だったが、日暮れは確実に早くなりつつあった。16時が近づいてくると夕方の気配が濃くなり出した。墓地の北側に広がるぶどう畑は黄色に色づいており、そこに傾きだした夕方の光が映えて、背景の青く透き通った空とくっきりとした対照をなしていた。ときおり吹く風に鳥

ウィーンの墓の物語（北原寛子）



カルクスブルク墓地
上 ホーフマンスタールの墓
中 中心に立つ十字架
下 北側のぶどう畑の眺め

のさえずりや祈祷の声が混じり、ここにも現世の時を超越した空間が広がっているように思われた。文学や音楽などの傑作の中には、人間の在り方を個別具体的でありながら普遍的に俯瞰しているように感じられる場合がある。美しい自然や情景に出会った時にも、芸術的な美と同様に、時間の束縛から解放された圧倒的な何かがあるのだという感覚に襲われる。

ウィーンは街のどこをみても美しい。たしかに若者がスプレー缶で落書きした奇妙で周りとなじまない意匠が突如現れることもあるし、ごみが散乱していることもある。しかし無秩序に張られたステッカーがはがれかけたりいろあせたりしていたとしても、それはそれで味わいに変えてしまえるほど余裕のあるたたずまいをしている。そんな捉えどころのない永遠の都ウィーンについて、墓地を切り口にしてその文化を垣間見て語ってみたい。ウィーンの墓地は、世界の文化に影響を与え続けている偉人たちも数多く眠っているので、彼らの生きた過去と、彼らの業績の恩恵を受ける現在をつないでくれている場所でもある。街の施設として考えても、広くて静かで木や花が多く、休息や憩いを与えてくれる点で興味深い。そのようなわけで、ウィーンの墓にまつわる話をしたい。

1. 中央墓地

現在のウィーンが位置する盆地付近には、紀元前1世紀頃にはすでにケルト系の部族が定住しており、南のローマ帝国側と鉄や琥珀などの交易をおこなっていた⁵。ドイツ語ではWが濁音となるのでこの街の名は「ヴィーン」と発音されるが、これはケルト語の「白い川の入り江」を意味する地名が元で、それがラテン語風にヴィンドボナ Vindobona とされたことに由来すると伝えられている⁶。紀元1世紀になるとローマ帝国は北に向かって勢力を拡大させ、ウィーンのあたりでもケルト系の部族を征服して軍の駐屯地を築いた。その後ローマ帝国が5世紀頃勢力を失っていくと、ヴィンドボナも他の多くの古代ローマ帝国都市と同様に一時的に衰退した。しかしその後諸部族の移動や勢力争いが落ち着き、カール大帝が西暦800年にフランク王国のカール大帝が教皇レオ三世から冠を受けた。さらにその後継となる国である東フランク王国オットーI世が962年にローマ教皇から冠を受けて皇帝となり神聖ローマ帝国が成立し、現在われわれの知る中世のヨーロッパが形成されていった。その時代ウィーンは異教徒に対する帝国の南東の砦として軍事的に重要な拠点となった。1246年にウィーンを支配していたバーベンブルク家が断絶したとき、現在のスイスに領土を有していたハプスブルク家のルドルフはこの地の防御を担うことになった。差し迫った異民族との戦争で勝利したことでこの地での支配を確立し⁷、また1256年以来空位が続いていた神聖ローマ帝国皇帝に1273年推挙され、一気に有力諸侯の仲間入りを果た

⁵ Vgl. Ortoft Harl: Vindobona. Das römische Wien. Wien, Hamburg: Zsolnay, 1979, S. 15.

⁶ 「Vienna」, 『新英和大辞典』研究社, 1980年, 2357頁参照。Auch vgl. O. Harl, a. a. O., S. 21.

⁷ オーストリアを代表する詩人の1人フランツ・グリルバルツァーの戯曲『オトカル王の幸福と最後』(1825)は、バーメンの王オトカルとハプスブルク家ルドルフI世を登場させ、この時の争いをテーマにしている。

した。その後は1806年にナポレオンに攻め入れられて神聖ローマ帝国が名実ともに崩壊するなどの波乱を経つつ、1918年に第一次世界大戦での敗戦をきっかけにオーストリア＝ハンガリー二重帝国が崩壊して領土が大幅に縮小されるまで、あるときはスペインまで、またあるときはウクライナ西部まで、時代による変遷はあったもののヨーロッパの多くの地域を支配する欧州屈指の有力者としてハプスブルク家は栄え続けた。ウィーンはハプスブルク家の御座所としてヨーロッパの政治と文化を牽引してきた。そして今日なおオーストリア共和国の首都として200万人の人口を擁する大都市である⁸。数世紀にわたって世界の文化の最先端を走った街には歴史的な建造物が立ち並び、人類の宝といえる多くの美術品が見学でき⁹、クラシック音楽の分野ではウィーン国立歌劇場や楽友協会ホールなどで世界トップレベルの公演を日々提供し続けている。

ウィーンは近代に都市として発展する過程で、人口増加に伴って墓地の確保についても対応せざるを得なくなった。何度か改革がなされているのだが、19世紀後半には市内に散見する小規模の墓地を統合することになった。そこで建設されたのが現在の中央墓地 Zentralfriedhof である。ウィーン市の南西の端に近い場所に1872年から建設され、1874年11月1日に開設式典が執り行われた。250万平方メートルを擁し、ヨーロッパ第二の規模を誇る墓地となっている¹⁰。中央墓地にはいろいろな宗教に対応したセクションがのちに設けられていき、現在ではキリスト教でもロシア正教徒やギリシャ正教徒のための区画もあり、さらにユダヤ教徒やイスラム教徒、仏教徒などがそれぞれの教えに則って安らかに眠れるように整備されている。ゆったりとした敷地には丁寧に手入れされた規則的な道路が伸び、木々も生い茂り、誰にとっても憩いの場となるように整備されている。ジョギングコースとして活用されることを想定したような看板も設置されていて、墓地であるとともに緑化公園としての機能も備えているようである。普段は人影もまばらだが、11月1日の万聖節には大勢の市民が墓参りに訪れていた。市の中心部から墓地まで伸びる路面

⁸ Vgl. Stadt Wien: Bevölkerungsstand - Statistiken <https://www.wien.gv.at/statistik/bevoelkerung/bevoelkerungsstand/> [Letzter Zugang am 20. Mai 2024.]

オーストリアの人口は約916万人（2024年1月1日時点での推計、Vgl. Statistik Austria: <https://www.statistik.at/> [Letzter Zugang am 20. Mai 2024.]）で、ウィーン市周辺のニーダーエスターライヒ州の人口を含めると、オーストリアの総人口のおよそ3分の1がウィーン市およびその周辺に集中しているという。ちなみに国土は83.878 km²（Vgl. ebd.）で、北海道の8万3,424 km²よりは若干大きい程度の「小ささ」である。北海道の人口は522万人（2020年現在、Vgl. 国土交通省：参考資料 北海道の現状 [chrome-extension://efaidnbnmnnibpcjpcgclclefindmkaj/https://www.mlit.go.jp/common/001402771.pdf](https://efaidnbnmnnibpcjpcgclclefindmkaj/https://www.mlit.go.jp/common/001402771.pdf) [Letzter Zugang am 20. Mai 2024.]）なので、北海道と同じぐらいの面積に倍近い人口を擁して1つの国として独立していると想像するとわかりやすい。札幌市の人口は196万人（2024年5月1日時点での推計値、Vgl. 札幌市ホームページ：人口統計 <https://www.city.sapporo.jp/toukei/jinko/jinko.html> [Letzter Zugang am 20. Mai 2024.]）なので、ウィーン市をイメージするときは、札幌と比較して考えるとその特徴がより明白に感じられるだろう。

⁹ ウィーンの旧市街にあたる1区は、ユネスコの世界遺産に2001年から登録されている（Vgl. UNESCO: World Heritage Convention <https://whc.unesco.org/en/list/> [Letzter Zugang am 20. Mai 2024.]）。

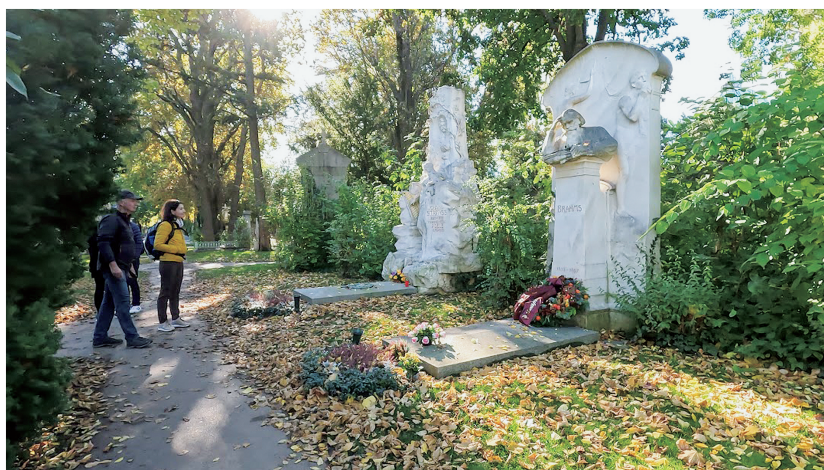
¹⁰ Vgl. Helmut Widmann u. a. (Hg.): Es lebe der Zentralfriedhof. Wien; Schmid Verlag, 2005, S. 7f. 1840年の人口は34万人で、1879年には63万人まで増えたという。その後今日にいたるまで増加が続いているわけだが、これほどの人口増加がすでに19世紀半ばに起こっていたということが、この街の政治・経済・文化各方面における存在感と役割の大きさを表しているといえるだろう。



万聖節に墓参する人々



名誉墓地 区画 32A



ブラームスとヨハン・シュトラウス（息子）の墓

電車 71 番線¹¹ は朝から大混雑である。彼らは中央墓地・第二門横に並ぶ売店に入ると、花輪やろうそくを買って求めてから目的の墓石に向かって散り散りになっていった。中にはケーキの入った箱をぶら下げた人たちもいた。きっと晴天の青空のもとで、亡くなった人を偲びながらゆっくりと語り合い供養するのだろうと思いつつ見送った。

観光客が中央墓地にやってくる時は、おおよそ「名誉墓地 32A 区」がお目当てであろう。そこには一番目立つ位置にベートーヴェン、シューベルトの墓が並んでいる。彼らの墓が並んでいるには理由がある。それについてはのちに触れたい。モーツァルトの名が刻まれた石碑もあるが、残念ながらこれは記念碑であり、こちらも後述するように彼の遺骨がそこに眠っているわけではない。しかしその横にあるブラームスとヨハン・シュトラウス（息子）の墓は紛れもない本物である。この 2 人は同じ時代に活躍し、親交を結んでいた仲でもある。その先を回り込むと、シュトラウス・ファミリーの父や弟たち、数々の歌曲で知られるフーゴ・ヴォルフ、オペレッタで名作を遺したフランツ・スッペらの墓にもつぎつぎに詣でることができる。これだけでも音楽愛好家にとっては有難い場所であり、たしかにウィーンに行くならば時間を作って訪問する価値があるといえる。

名誉墓地は、中央墓地が開設された後になってから多くの人に親しみある墓地にするために 1881 年に設置が決定したという経緯がある¹²。その目論見には先見の明があったといえる。この街で活動し世界中に影響を与えるほどの「成したこと（業績）」を遺した文化人はとても多く、地球上のいろいろなところでその恩恵や影響を受けている人々にとっては、そうした名誉墓地は自分たちに伝わってきた文化の源流を確かめることのできる貴重な施設になっている。また地元の人々にも故郷の豊かな文化力を誇るよすがとなりうる。中央墓地には、この名誉墓地 32A 区のほかに一見に値する唯一無二の場所がいくつもある。そのうちの 3 つを上げておきたい。

まず名誉墓地 32A 区を訪れるクラシック音楽ファンなら忘れずに訪れておきたい墓がある。それはアーノルト・シェーンベルクの墓である。彼はウィーン市 2 区のレオポルトシュタットに 1874 年に生まれ、音楽家としてのキャリアをスタートさせている。やがて 1926 年からベルリンのプロイセン音楽アカデミーで作曲の教授のポストについたが、1933 年にナチスが政権の座に着くとアメリカに移り、カルフォルニアに定住した。そして複数の大学で教鞭を執り、心臓発作を起こして 1951 年にその地で没した¹³。その彼が故郷ウィーンに葬られているのは知る人ぞ知る事実である。資料¹⁴を手に、このあたりのはずと探したのだが、当初なかなか見つけることがで

¹¹ ウィーンの路面電車はこれまで何度か路線の見直しがなされているが、71 番線は昔も今も中央墓地に向かう路線である。そのためウィーンでは、「死んでしまった」と言う代わりに「71 番線に乗っていった」という言い回しを使うことがあるとウィーン大学ドイツ文学科のヴィンフリート・クリークレーダー教授から教えていただいた。

¹² Widmann, a. a. O., S. 11. Friedhöfe Wien GmbH: Ehrengräber am Wiener Zentralfriedhof (Band 1). Wien: Friedhöfe Wien, 2022. S. 4.

¹³ 岡田暁生（監訳）『図鑑 世界の作曲家 中世から現代まで』東京書籍、2021 年、232-235 頁参照。

きなかった。何度も付近を回り、ようやく見つけたときに驚いた。たしかにガイドブックの写真の通りだったのだが——とにかく四角い。そして白い。四角い白い石が2つ組み合わされたような形をしていた。土台は平らな白い石で、その上に立方体に近い大きな白い石が角を下にして浮遊するように据え付けられている。墓碑銘は下の平たい台座に彫られてはいるものの、色などは付けられておらず、とても読みにくい。現代アート作品が設置されているかのように見え、周囲の生垣となじんでいてとても墓石だとは認識できなかった。そのうえ広大な中央墓地のど真ん中にあたる共和国大統領墓地を囲むロータリーに面した場所のため、なおさら彫刻作品のように見えてしまう。ベートーヴェンやブラームスの終の棲家からおよそ100メートル先にも十二階音階理論を築いた偉大な作曲家が眠っているので、ぜひともあともう一歩足を延ばしていただきたい。

シェーンベルクの墓地の前に来たならば、巨大な聖カール・ボロモイス教会の前に建っていることにもなる。この教会もお勧めの見学スポットである。建築が完成したのは1911年であるが1995年に修復されており¹⁵、それから約30年経った今日でも素晴らしい状態である。全体が白く明るく、平面的ながら繊細な装飾が随所に施されており、高いドームの内側に描かれた放射線状に規則正しく広がる星とそれを取り囲む鮮やかな青に彩られて、天国の静謐と平安を体現しているかのようである。マックス・ヘーゲレが設計したこの建物は、^{ユーゲントシュティル}青春様式 Jugendstil に属するものである。この建築様式は日本ではしばしばフランス語でアール・ヌーボーと呼ばれている。19世紀半ばのイギリスから生まれ、20世紀前半にかけての世紀転換期にヨーロッパを席卷した芸術様式で、それまでのバロックの立体的で具体的な形象とは一線を画し、植物文様を平面的な色と形に形式化して表現し、なおかつ鉄やガラスといった当時最先端の素材を多用するという特徴がある¹⁶。聖カール・ボロモイス教会では、正面入り口から礼拝堂に入るだけでなく、側面にある別の入り口から地下の墓所へも詣でることもできる。ここはある意味で怖いところと言えるかもしれない。不気味や不吉だという意味ではなく、その正反対で、あまりに美しく、静かで、清らかなため、天国に迷い込んだかのように錯覚するからである。暑い夏の日でも地下の墓所はひんやりとしているが、乳白色のガラスを通して明るい日差しが届き、白く輝く壁が神々しさをますます強める。広い中央墓地はどれも静かだが、この地下の墓所ほど静かなところはどこにもないだろう。俗世の喧騒どころか鳥のさえずりやそよ風が枝葉を揺らす音すら届かず静寂が支配している。そこで1人でじっとしていたならば、時間の流れを忘れてしまいそうになる。円形の

¹⁴ Vgl. Friedhöfe Wien GmbH, a. a. O., S. 218. ここで手引きとして用いた書籍は、タイトルを日本語訳すると『ウィーン中央墓地名誉墓地(第1巻)』となる。中央墓地の売店で販売されていたもので、第2巻はウィーン市内各地に点在する墓地における名誉墓地を紹介する図鑑になっている。墓地を管理・運営しているウィーン市グループのウィーン斎場が出版している案内書ということになる。墓地を訪れる人が購入できるようにこのような書籍が出版されているという事実からして、文化を守り継承する熱意が感じられる。

¹⁵ Widmann, a. a. O., S. 99.

¹⁶ 熊倉洋介, 末永航, 羽生修二, 星和彦, 堀内正昭, 渡辺道治『カラー版 西洋建築様式史』増補新装版, 美術出版社, 2017年, 156-157頁参照。

ウィーンの墓の物語（北原寛子）



アーノルト・シェンベルクの墓



カール・ボロモイス教会 外観↑ 地下の墓所↓



内部にはいくつかの墓所が設けられているが、正面奥に安置されている堂々とした棺には、この教会の建設中1910年に他界した当時のウィーンの市長カール・ルエーガーが眠っている¹⁷。棺の横の壁には、この敏腕市長にささげられた追悼の飾り帯がところ狭しと吊り下げられている。地上に足がまだついているのか不安を覚える空間であり、生きているうちに天国の片鱗を覗いてみたいとすれば、1人で気を引き締めて入ってみるとよいだろう。

ウィーン中央墓地は、キャロル・リード監督の映画「第三の男」(1949)¹⁸でも重要な場面の舞台を提供している。物語は主人公のアメリカ人作家ホリーが友人ハリー・ライムを訪ねて第二次世界大戦時の廃墟が残るウィーンにやって来るところから始まる。彼が到着してみると、ハリーは交通事故で死亡しており、ちょうど棺が埋葬される場所であった。そしてドキドキはらはらす紆余曲折のサスペンス展開の後、ラストシーンは再び最初と同じ場所に戻る。ヒロインの寂しげな後ろ姿と、それを見送る主人公の表情が万感の思いを掻き立てる名場面となっている。この印象的な場面の背景となっているのは区画11周辺の並木道だそうである¹⁹。似たような並木道がいくつも伸びているうえに、樹木が成長して立派になっており、春から初秋にかけて青々とした葉が茂っているとのおさら映画の切ない雰囲気とは印象が少し異なる。しかし映画の世界が実在することを実感して満足することは可能である。ちなみにこの映画については、プラーター公園の大観覧車や街の中心部のマリア・アム・ゲシュターデ教会、ヨーゼフシュタット劇場など、映画に登場した建物の多くが今日なおも健在である。それらの名所とともに銀幕に刻まれた古のウィーンを身近に感じるよすがとしても、脇の並木道に立ち寄ることをお勧めしたい²⁰。

2. 墓だらけだったウィーンと啓蒙専制君主ヨーゼフ二世の改革

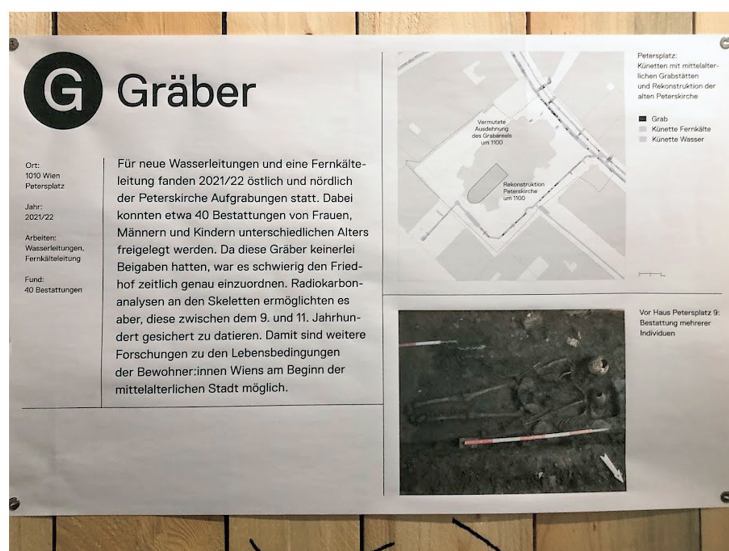
すでに言及したように、ウィーンにはローマ帝国の軍駐屯地があった。その周辺には市民たちの集落が発達し、広がっていた。彼らは墓地を宗教上かつ衛生上の観点によって住宅地とは厳格に分けていた。それでも故人に対する愛着の念から遠くに墓を設置することを好まず、さらに集

¹⁷ そのために聖カール・ボロモイス教会は「ルエーガー教会」という通称で呼ばれることがあるという。Vgl. Widmann, a. a. O., S. 97.

¹⁸ 宮本高晴「リード、キャロル」、岩本憲児 他(編)『世界映画大事典』日本図書センター、2008年、948-949頁所収参照。

¹⁹ トニー・リーヴス『世界の映画ロケ地大事典』齋藤敦子監訳、晶文社、2004年、404-405頁参照。

²⁰ 反対にお勧めしたくない名所もある。それは同じく映画「第三の男」でもっとも盛り上がる場面の背景となった下水道施設である。ガイド付きのツアーで見学することができる。下水道施設を管理しているのがウィーン市水道局で、観光ツアーもこの部門の管轄下にあり、ガイドさんたちは正真正銘の水道局職員であった。本物の下水道なので、率直に言って大変臭かった。ツアー後には鈍感な筆者でも体にこびりついた異臭が気になり、2回シャワーを浴びたほどだった。とはいえ、興味深いのだけはたしかである。下水道は階層構造になっており、上部が下水ではなはだ臭いのだが、下部は上水用の水路で臭いはまったく気にならなかった。映画を観てこのツアーに参加すると、両方の水路が画面に登場したことがきつとわかるはずである。しかし下水道にもぐらずに、入り口で記念撮影するのが一番良いであろう。入り口はカールスプラッツにあり、背景の建物も映画の画面と同じままなので、とてもよい記念になるはずである。



ウィーン市ローマ博物館の展示より 2024年3月3日撮影

落からの行き来の都合を考慮した結果として、集落に通じる街道沿いに墓地を設けていた。墓には名前や身分・職業などが刻まれており、町を訪れる人にとっては住人たちについての貴重な情報源となっていた²¹。ウィーンでは工事の際に地下を掘ると、いまなお過去のさまざまな遺物が姿を現すという。2024年3月3日にローマ時代の墓についての展示資料を確認しようとウィーン市ローマ博物館を訪れたのだが、墓についての展示は最新の研究成果を反映するためか一部が張り紙であった。とくに興味深かったのは、市内中心部にあるペーター教会の周りで2021-22年に水道管および空調設備管のために行われた工事で見つかったという墓40基についての報告である。男性・女性・子どもの墓だったそうだが、副葬品がなかったため年代測定が困難だったそうで、元素測定の結果9-11世紀と判断されるという。これはローマ時代というよりもすでに中世と呼ばれる期間である。展示には1100年頃のペーター教会の御堂とその周りの墓地も現在の地図の上に重ねて表示されている。これを見ると、当時のペーター教会はとても小さな建物で、現在ペーター広場と呼ばれる教会の周りの道路はちょうど教会に付属する墓地になっていたということもわかる。ペーター教会は4世紀後半には創建されており、ウィーンで最も古い教会である²²。

18世紀前半までのウィーンの教会を描いた版画などを見ると、街の中心にあるシュテファン大寺院も、リング通り^{シュトラッセ}に面したカール教会も、現在教会の周囲で広場として活用されている空間に墓地があったことがわかる²³。そのほかにも、ショテッテン教会やミノリーテン教会、ミヒヤ

²¹ Vgl. Harl, a. a. O., S. 231.

²² Vgl. Sonja Simon u. a.: Rektoratskirche St. Peter Wien. Regensburg: Schnell und Steiner, 2019, S. 2. 現在のペーター教会は、18世紀前半に建設されたバロック様式の壮麗な建物である。

エル教会など市内中心部の教会の多くで周囲には墓地があった²⁴。さらに街の中心部に隣接する現在の8区にあたる区域では、17世紀は墓地が広がっていた²⁵。このように18世紀半ばまでのウィーンは、住民が生活する空間と、死者を弔う空間が密接し、一部は重なり合うように存在していた。

ヨーロッパの大都市は、近代たびたびペストなどの疫病に見舞われている。ウィーンももちろん例外ではない。ボッカッチョ作『デカメロン』の契機となったのはフィレンツェを1348年に襲ったペストだが、その波は1349年のウィーンを襲い、毎日500-700人が死亡したとされる。そのような疫病による大惨事は、1410年、1541年にも起こったという²⁶。1679年のペスト禍においては、とある伝説がウィーンで誕生している。それは民謡「愛しいアウグスティン」O du, lieber Augustin に歌われている出来事である。その歌は次のようなものである。

ああ愛しいアウグスティン、アウグスティン、アウグスティンよ、
ああ愛しいアウグスティンよ、すべてが無くなった。
お金がない、人（乙女）もない、
すべてが無くなった、アウグスティンよ。
ああ愛しいアウグスティンよ、
すべてが無くなった。
上着が無くなり、杖もどこかへ。
アウグスティンはぬかるみに倒れる。
ああ愛しいアウグスティンよ、
すべてが無くなった。
豊かなウィーンだって
アウグスティンみたいに無くなった。
僕と一緒に同じ気持ちで泣いてよ、
すべてが無くなった！
毎日がおまつりだった、
そして今は何だ？ペスト、ペストだよ！
盛大なしかばね祭り、
これが残っただけ。

²³ Vgl. Werner T. Bauer: Wiener Friedhöfsführer. Genaue Beschreibung sämtlicher Begräbnisstätten nebst einer Geschichte des Wiener Bestattungswesen. 5., ergänzte und vollständig überarbeitete Neuauflage. Wien; Falter Verlag, 2004, S. 31 u. 35.

²⁴ Ebd., S. 29-33.

²⁵ Ebd., S. 39.

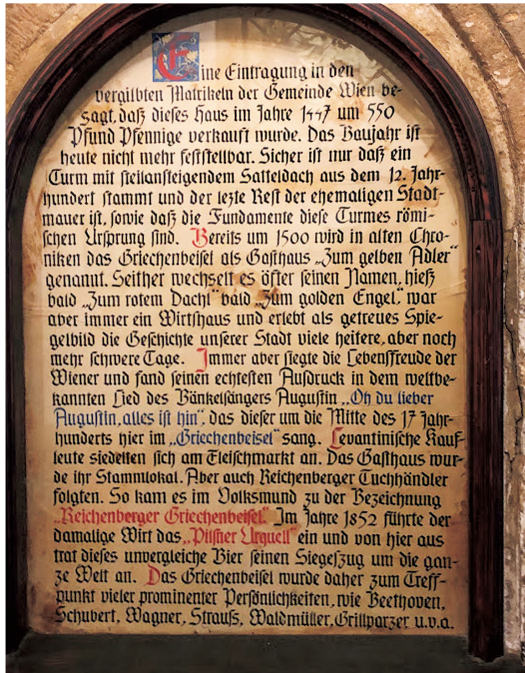
²⁶ Bauer, a. a. O., S. 24.



上：愛しのアウグスティンが活動した店の外観

下左：愛しのアウグスティンが活動した店の碑文

下右：愛しのアウグスティンが誤って放り込まれた集団墓地のあったウルリッヒ教会



アウグスティン、アウグスティンよ、
墓に入って横になれよ！
ああ愛しいアウグスティン、
すべてが無くなった！²⁷

アウグスティンはドゥーデルザック Dudelsack というバグパイプの一種を抱えて酒場で演奏する音楽家であった。この歌は、本人の作と信じられている。この年はペストによってウィーンの街でも5万人近い死者が出たとされる。ペストで亡くなった人の遺体はひとまず路上に安置され、夜ごとに担当の役人によって台車で回収され、共同墓地に葬られていた。そんな暗い雰囲気が立ち込めるウィーンで、楽師アウグスティンは酒に酔って仕事帰りに路地で眠り込でしまった。そしてペスト被害者と勘違いされて台車に乗せられ、共同墓地の穴²⁸に放り込まれた。翌朝になってアウグスティンは目覚め、墓地から這い上がってきた。ペスト患者たちと密に接したにもかかわらず、彼に病気の症状は出ず、その後寿命を全うして1685年に没したと伝えられている²⁹。重苦しい悲劇の中であって起きた奇跡的な茶番である。アウグスティンが仕事をしていた酒場はシュヴェーデンプラッツ駅の近くにある。建物に付けられた碑文によると、店の名前は変遷しているが、そこには15世紀後半以来一貫して飲食店が営まれていたという。ベートーヴェンが存命だったときには、彼も通ったという伝説も残されている。現在は「ギリシャ酒場」Griechenbeisl という名前のレストランで、雰囲気もよく、大変おいしい料理を提供してくれている。

その後1713年にもペスト禍がウィーンを襲い、8500人が亡くなったと伝えられている³⁰。市内の目抜き通りグラーベンにそびえたつ立派なペスト記念塔は、ペスト禍克服の記念碑として18世紀に建立されたものである。

かつては市内中心部に墓地が広がっていたにもかかわらず、現在それらが見られないということは、それが撤去されるなり破壊されるなりして無くなったということを意味している。街の景観と機能に重要な変革をもたらしたのは、とある人物の確固たる意志である。その人物とは啓蒙専制君主として知られるヨーゼフ二世である。マリア・テレジア帝の長男で、質素と学問を好んだ合理主義者の皇帝は、ウィーンを清潔で快適な都市にするための改革をいろいろと実施した。行き過ぎた改革は市民の不興を買い、彼が1790年に亡くなる数年前から一部を撤回していかなければならなかったほどである。ウィーンでは人口がつねに増大する傾向にあり、人口過密の都市が抱える住環境等の問題にすでにヨーゼフ二世の祖父に当たるカールVI世の治世においても解決策

²⁷ Rudolf Schuppler: Sagen aus Wien. Berndorf, Karl-Verlag, 2018, S. 35.

²⁸ Vgl. Bauer, a. a. O., S.25f. 7区ノイバウ Neubau があるウルリッヒ教会傍の墓地に誤って投げ込まれた。その1ブロック北には現在アウグスティン広場がある。アウグスティンの像もここに立っているはずなのだが、2024年3月現在地下鉄工事のために撤去されていて見るができなかった。

²⁹ Ebd., S. 25f.

³⁰ Ebd., S. 26.

が求められていた。ヨーゼフ二世は墓地のもたらす水質汚染などの衛生問題を理由に、1783年に市内中心部の埋葬を一切禁止し、代わりに周辺部に墓地を集約すると布告した。そうして設置された墓地では個人の墓碑も撤廃され集団埋葬がおこなわれることも、人々は受け入れざるを得なかった。その時に用いられたのが、皇帝みずから発案したとされる「節約棺桶」である。馬車の荷台で金具を外すと、棺桶の底が開いて布にくるまれた遺体が共同墓地に入る仕組みになっている³¹。ヨーゼフ帝は大学や病院などの施設を教会ではなく公共によって運営するよう改革を進めたことでも知られているが³²、葬祭の極端な合理化は改革の行きすぎでもある。華美や奢侈を戒めようとした親切心から考え出されたのかもしれないが、親しい人とのしばらくの別離に際し心を尽くしたいと思うことも、人間の自然な感情のうちの1つであろう。もちろんのちの時代にこうした制度が撤廃されたことは言うまでもない。

3. モーツァルトの悲劇

不世出の天才ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトが35歳の若さでこの世を去ったのは、1791年12月5日のことである。彼が没したのはヨーゼフ二世からその弟のレオポルト二世に代替わりした時期だったが、こともあろうに葬礼簡便令がなおも効力を有していた。そのため葬式も質素にならざるを得ず、価格8グルデン56クロイツァーの第三等の安いコースが選択されたという。モーツァルトの遺体を納めた棺は、シュテファン大寺院の北西の外壁に今もみられるクロイツ^{カペレ}室に1日安置されたのち、悪天候のなかわずかな見送りの人々に付き添われてシュトゥーベン^{トア}門を抜けて運ばれていった。馬車はヨーゼフ二世の1783年の布告によって設営されたザンクト・マルクス墓地に向い、彼の遺体を共同墓地に葬った³³。1984年に制作されたミロス・フォアマン監督による映画「アマデウス」の終盤で、布にくるまれたモーツァルトの遺体がどざりと共同墓地に落とされる衝撃的な場面があるが、残念ながらその演出は当時の状況に適っている。

モーツァルトが亡くなってから17年経った1808年に、ザクセン王国公使館参事官のグリーンガーという人物がモーツァルトの遺骨を探そうとしたという。ところがその時すでに墓地で埋葬に従事していた人たちは、この天才音楽家をどこに葬ったのか記憶があやふやになっていたという。その後1855年に公式の調査が行われたが、実りある結果を出すことができなかった。そして1859年になってザンクト・マルクス墓地にモーツァルトを追悼する記念碑が建立された。これが中央墓地が開設されて名誉墓地が設置されることになった際に、モーツァルトの墓の代わりに移設された。その後ザンクト・マルクス墓地には改めて折れた柱に頭を抱えた天使が寄り添う現在の記念碑が設置され、第二次世界大戦による損傷と修復を経て今日にいたっている。ザン

³¹ Ebd., S. 71-78.

³² 山之内克子『世界史リブレット 74 啓蒙都市ウィーン』山川出版社、2003年、67-71頁参照。

³³ Ebd., S. 79f. H. C. Robbins Landon: 1791. Mozarts letztes Jahr. München; Deutscher Taschenbuch Verlag u. Kassel, Basel, London; Bärenreiter Verlag, 1991, S. 183-212.



ザンクト・マルクス墓地

上左 入口

下左 モーツァルトの記念碑

上右 墓地から見える市営熱供給公社の灰色の建物

下右 墓地の景色

クト・マルクス墓地は、中央墓地の開設にあたって墓地としての役割を終えた。しかしその後郷土史家ハンス・ベマーによって再発見され、1937年から緑地公園として一般開放されている³⁴。

ウィーン中心部からザンクト・マルクス墓地に出かけるのは、それほど困難なことではない。中央墓地に向かう路面電車71番線に乗り、途中のザンクト・マルクス停留所で下車すればよいだけである。しかし実際に行ってみると、街の中心からの距離とは関係なく、そこが他の領域から切り離されてはっきりと切り取られたような空間であることがわかることだろう。墓地の入り口

³⁴ Vgl. Bauer, a. a. O., S. 76ff.

には並行して電車の線路が走っており、正面からすぐに近寄ることはできず、線路を渡れる所から回り込んでなくてはならない。そして墓地の後ろには市営熱供給公社の灰色の施設がそびえたっている。南側には高架道路が走っているのが見え、つねに車が通り過ぎる音が響いている。線路や道路で他とは隔絶された区画で、現在にいたってなおも物寂しげな雰囲気のを漂わせている。ましてやモーツァルトの時代では、どれだけ侘しく悲し気なところだったのかと胸が押しつぶされるような感慨に絶えない。

ところが中に入ってみると、このうち捨てられた墓地は、なんと穏やかで平安と自然に満ち溢れていることだろうか。生い茂った木々の間に、およそ100年から200年前の墓石が顔をのぞかせており、それぞれが古代神殿を模した形をしていたり、嘆きの天使がそっと寄り添っていたり、死者を悼む気持ちさがさまざまな意匠にあらわされている。葬られた人の名前や生没年を読んでいると、ここにかつて生きた人々の存在がまざまざと感じられ、死の陰に支えられつつ生きるために背中をやさしく押されているような気持になる。モーツァルトは、「成したこと」とともに今も生きているのだから、永遠の命はあるのかもしれない。

4. ベートーヴェンとシューベルトの墓

さて、なぜベートーヴェンとシューベルトの墓地が中央墓地で並んで設置されているのかという話題に入ることにしたい。それはシューベルト自身が兄フェルディナンドにベートーヴェンの隣に葬ってほしいと遺言したからである。兄は父親の承諾を取り付けたり、多額の超過出費を払ったりしてその希望をかなえた³⁵。

ベートーヴェンが57歳で没したのは1827年のことであった。彼は生前から名声を勝ち得ていたので、葬儀にはおよそ2万人もの人々が参列し、シューベルトも敬愛する先輩の棺を担いだという³⁶。なんともうその次の年に、シューベルトはわずか31歳という若さでこの世を去らねばならなくなった。仲間内では才能を認められてはいたが、音楽家として名声や、ましてや経済的成功などというものを獲得するまでにはなおも道半ばであった。そうした状況にあって、「ベートーヴェンの横に墓が欲しい」という希望はある意味出過ぎであったのかもしれない。しかし彼があえてそれを口にし、兄がその実現のために骨折ったおかげで、2人の偉大な楽聖が並び眠るといふ伝説も生まれたといえる。シューベルトは彼の才能を高く評価したロベルト・シューマンら計らいもあり、死後ようやく高く評価されるようになり、今日の名声にいたっては言わずもがなである。

³⁵ Vgl. August Reissmann: Franz Schubert. Sein Leben und seine Werke. Berlin, 1873. Faksimiledruck. Teuchtingen; Literaricon, 2018, S. 261. 参考にした上記の資料には、兄フェルディナンドは40フロリンに加えて70フロリン支払ったとある。モーツァルトの葬儀と比べると、額が桁違いなのがわかる（グルデンとフロリンはほぼ同じ単位とされる）。およそ40年近い年月が流れているとはいえ、モーツァルトの葬儀のつましさがあらためて際立つ。

³⁶ 岡田、前掲書93頁参照。



上 シューベルト最後の住居 共同廊下
下 シューベルト最後の住居 室内

ちなみに、ベートーヴェンとシューベルトが最初に葬られた墓地は、もちろんそのころは影も形も構想もなかった中央墓地ではない。当時はヴェーリンクの東墓地と呼ばれていたところで、今日のヴェーリンク・シューベルト公園である。この墓地もザンクト・マルクス墓地と同様に中央墓地の開設にあたって閉鎖となった。ただしザンクト・マルクス墓地が墓地としての形をそのまま保っているのに対して、ヴェーリンク・シューベルト公園は、墓地は北側の1画のみ施錠されて残っているだけで、大部分が児童用の遊戯設備やバスケットボールコート、ドッグランなどに改築されている。ベートーヴェンとシューベルトの墓は、改築されたほうの1画にあるのだが、公園を囲む壁に2基の墓石が並んで残されており、往時を偲ぶことができる。ヴェーリンク・シューベルト公園のある18区は、現在は住宅地が立ち並ぶにぎやかな地区になっている。小学校が近くにいくつもあるためか、子どもたちのよい遊び場であり、夕方になると元気な声が響いて活気づく。この公園から西に1キロほどのところにフォルクス・オーパーというオペラ、バレエ、ミュージカルなど多様な演目で知られる劇場がある。さらにそこから西北西に1キロほど進むと、シューベルト自身の生家もある。生家や最後の住まい、最初に葬られた墓地やウィーン少年合唱団の前身にあたる寄宿学校の生徒であったことなど、シューベルトにまつわるあれこれを見渡すと、本当にウィーンに生まれてこの街で呼吸して生を全うした人だったのだということがよくわかる。シューベルトもまた、「成したこと」によって死後に世界中に名前が轟き、愛され、慕われている。身体の死は精神の死と別物で、リュッケルトが詠うように、あの世に行った人はその人だけの空間にせよ、どこか別の世界で生き続けているのかもしれない。

5. おわりに

優雅で高級感あふれるウィーンの文化だが、実際に現地に赴いてみると、誰もそれを気取って鼻にかけている様子はない。地元の人はいたって気さくで、むしろ冗談好きでさえある。宮殿のように美しい国立歌劇場で素晴らしい演奏を披露しているオーケストラ団員も、公演が終わったら楽器ケースを抱えて自転車に乗ったり公共交通機関を利用したりしてさっさと帰途につき、庶民感覚の持ち主であることを隠すようなそぶりはない。しかしだからこそ、彼らはその芸術のなかで喜びや悲しみ、ささやかな自然の美などを見事に再現できるのかもしれない。

ウィーンに脈打つ何かを楽しもうとするパワーや諧謔の精神といったものには、墓地について物語ろうとして資料を収集しているときにも感じ入らされてしまった。例えば中央墓地の100周年を祝してヴォルフガング・アンブロスが発表した曲のタイトルが「中央墓地よ、生きよ！」Es lebe der Zentralfriedhof!である³⁷。「～生きよ！」は日本語の「万歳」に当たる表現で、誰かにたい

³⁷ オーストリアはクラシック音楽のイメージが強く、また筆者がその熱心な信奉者であるため、今回のテーマに関してもクラシック音楽作曲家に偏ってしまった感は否めない。ヴォルフガング・アンブロスはおーストロポップ Austropop（オーストリア産ポピュラー音楽、宇宙を意味する接頭辞 astro-とオーストリアの英語名からの造語を掛けている）の代表例に入れてもよいだろう。今回の「墓の物語」という主題からすると、歌手ファル

してその長寿を願う意味がある。墓地に向かって生きよと言っても死んでるがな、とおもわずその撞着した表現に突っ込まずにはいられない。言葉尻や本質をさっとつかみ取り、軽やかに捻り上げ、共感を誘いつつ笑顔を引き出すことを巧みにやってのける。

またある時は路面電車の中で、黒いTシャツを着た男性を見かけた。胸元にウィーン市営事業のロゴが印刷されている。ウィーンでは公共交通機関の運転手や救急職員などが制服のまま通勤している姿は珍しくないで、胸元に市のロゴが入った服を着ている人がいても普通である。しかしそこで目を引いたのは、一緒に印刷されていたキャッチコピーである。「ウィーン市営墓地」「ここならあなたもちゃんと横になれます！」—いや、そうだろうけれど…。また思わずフレーズに突っ込んでしまった。墓地を運営する側も、なんと軽やかで楽し気な様子なのだろうかと思わず目を見張る。その後中央墓地の売店で同じものが購入可能とわかり、もちろん入手した。その売店では「骨壺まで体操して行くね」Ich turne bis zur Urne. (動詞「体操する」の「私」が主語の時の形 turne が「骨壺」Urne と韻を踏んでいる、さしずめ日本語の「ピンピンころり」か)と書かれたバックも売られていて、その軽やかな姿勢に敬意を表すべく、もちろん購入した。

ウィーンの墓の物語に取り組むにあたって、もっとも到達しにくかった墓地についても最後に触れておきたい。それはドナウ河溺死者のための無名墓地である。1995年公開のリチャード・リンクレイター監督による映画「ビフォア・サンライズ 恋人までの距離^{ディスタンス}」にはこの墓地における印象深い場面がある。20世紀前半にドナウ河の身元不明の溺死者を葬ったという特色もあり、一度訪ねておくことにした。ところが、インターネットの地図アプリで確認すると、公共交通機関はバスが近くまで走っているものの便数が少ない。往復のことを考えると、バスでの移動は考えにくい。そこで出した苦肉の策がライドシェアの自転車を借りてみるというものである。ヨーロッパで自転車に乗るのは避けたかったのが本音である。理由は2つある。まず足の長さが違うので、乗りこなせる型の自転車があるかどうかという問題である。次の問題は、自転車は厳格に軽車両扱いされるので、自転車道が途切れたところでは車両を走らなくてはならないことである。自動車運転免許を持たない身で、ヨーロッパの右側通行に挑戦するのは、なかなか勇気がある。無名墓地は幸いにも、ウィーン市とニーダーエスターライヒ州の境に近い、交通量の少なそうな場所にある。そこで勇気を出して、中央墓地第二門のまえにあるドッグから漕ぎ出した。出発しようやく思い出したことは—自転車で乗るのが15年ぶりだという事実である。しかしもう後戻りはできない。いくどか間違った角を曲がり、必死で手信号を出し、目的地に近づいて行った。その道のりは、本当に町外れで、広大な畑の横の道を必死で進むことになった。目的地に近づくと、河川港の荷下ろし場になっていて、工場のような施設の間をしばらく走らなければならなかった。これで無名墓地に着くのかという不安だけが増していく。どうにか探し出してたどり

コも注目に値する。彼はすでに中央墓地区画40の名誉墓地で永遠の眠りにについている。扇形の透明なガラスに彼の姿が写し出された墓はとても有名で、いつ訪ねても、たくさんの新しい供物が並んでおり、ファンの来訪が絶えないことが容易に見て取れる。彼は「くたばれアマデウス」などの名曲を遺した。

ウィーンの墓の物語（北原寛子）



上左 「ここならあなたもちゃんと横になれます！」

上右 「骨壺まで体操して行くね」

下 無名墓地

着くと、思ったより小さな施設であることに驚いた。百聞は一見に如かずである。現在はすでに墓地として新たな埋葬者を受け入れることはないそうで、静かな1画になっている。大きな河川があり、そこに人がいるならば、命を落とす人も当然いる。そのようなわけで、自然と人間の宿命の間に落ちて眠っている人々に哀悼の気持ちを示してからそこを後にした。

帰路は、車道を避ける目的も兼ねてドナウ河の中洲に移動して地下鉄駅を目指すことにした。しかしせっかく自転車で中洲に来たので、中洲の最南端にも寄ることにした。無事にたどり着いたが、対岸の街の上空を見ると、一部に雨雲があり、晴天の部分とはっきりと分かれているのがわかった。雨雲がまだ遠く、また見晴らしもいいので、街の上空の様子を眺めやることができる。中洲を北進していると、その雨雲がいよいよこちらに進んできたのか、大粒の雨が落ち始めた。同時に、速度を上げれば逃げ切れるという希望があったので、必死で前進した。目論見は成功したが、その分体力も消耗した。15年ぶりの自転車の旅は2時間半で30キロ弱とちょっとした冒険に値するものになった。ウィーンという都市を水平に移動していたが、滅多に味わえない体験であり、珍しい旅行のようなものであり、さらには気持ちの中では天と地、この世とあの世を行き来するような錯覚とも重なるようでもあった。

オーストリアでは、有名人物のゆかりの地や芸術作品などで有名な場所を巡っていると、別の名所に近接していることがよくある³⁸。あまりにもいろいろな歴史や物語が秘められているので、帰って来てから新たな知見を得て再訪したくなることがたびたびある。あまりに頻繁で、過去30年以來しばしばウィーンを訪問することとなった。機会を得てこの度は1年間住ませてもらったが、それでもまた行かねばと思っている。太陽が輝き、空が透き通り、風が吹く。灰色の雲も冷たい空気も、永遠にめぐる時間の一部である。ウィーンでは生と死が互いに手を取り合いながら更なる歴史を紡ぎ出している。以上でウィーンの墓の物語とする。

³⁸ 例えば、上述のカールスプラッツは映画ファンにとっては「第三の男」の撮影地であるが、建築ファンにとってはオットー・ワグナーがデザインした青春様式の地下鉄駅舎入口とフィッシャー・フォン・エルラッハによるバロック建築の傑作カール教会を同時に眺められる貴重なスポットである。

冒頭で取り上げたマーラーの墓があるグリンツィング墓地には、現代オーストリアを代表する作家のうちの1人であるトーマス・ベルンハルトの墓もある。

また先に取り上げたシューベルト最後の住まいでは、その家の窓から反対側の建物についている20世紀の指揮者エーリッヒ・クライバー（カルロス・クライバーの父）生誕の家を記念するプレートを眺めることができる。

さらにザルツブルクでの例であるが、映画『サウンド・オブ・ミュージック』のなかでドレミの歌が印象的に歌われるミラベル宮殿の庭園から出ですぐ先にモーツァルトの実家があり、その横にドップラー効果を発見した物理学者ドップラーの実家を示すプレートが付いており、そこから横断歩道をはさんだ正面の家が20世紀の大指揮者ヘルベルト・フォン・カラヤンの実家である。

オーストリアは圧倒的な文化が北海道とほぼ同じ面積から発せられているだけあって、「名所の渋滞」という珍しい現象があちこちで見られる。